

## アメリカ通信教育のスタディ・ガイド

V. V. ピットマン, JR

多 田 方 訳

アメリカでは60を超える大学（単科大学，総合大学）が通信教育による講座を設けている。大学がつくる通信講座の基本的な構成要素は，印刷されたシラバス（講義要綱），普通，より正確には「スタディ・ガイド」と呼ばれているものである。これらスタディ・ガイドは，民間出版社が時にスタディ・ガイドと呼ぶような教科書に付随して書かれたワークブックとは異なり，各大学が地方ごとに自分たちの通信教育課程で使うためにつくったものである。スタディ・ガイドは通常，所属機関の教授あるいは大学院生たちによって執筆され，自主学习部（“Independent Study” office. この用語はアメリカの大学では通常通信教育を指して使われる）のスタッフの手で編集され，大学の印刷部門か刊行部門において複製，製本される。通信課程のスタディ・ガイドの製作は，限定的ではあるが生き々とした学術出版の一形態となり，大学内における家内産業の一つにまでなったのである。

スタディ・ガイドの大きさは20ページから250ページ程度にわたり，時にはもっと長くなる。判型は教科書に似ていて，本扉，著者の著作略歴，序文，目次，参考文献といった点が共通している，中味は課業，あるいは単元に分けられ，教科書の章立てに似ている。単元の長さスタイルはコースによって異なるが，到達点と目標にかんする記述，読書課題，著者の説明と注解，学習上の質問とか練習問題をふくむのが通例である。しかし，一般市販の教科書やワークブックとは違って，スタディ・ガイドは多数の読者相手に書かれるものではない。スタディ・ガイドは一つの学部，一人の講師の教授目標を満足させるために書かれ，わずか一大学に設けられた特定の一課程に入学する学生という限られた読者を目標としているのである。

スタディ・ガイドはテキストでもなく、また単なる一連の印刷された講義というわけでもない。課業単元の解説部分は講義ほど長くはない。こうした型式は執筆者たちに簡潔に書くことを強いる。すなわち、講義では要求されない程度内で、材料類を注意深く吟味し、組み立て、練り上げねばならない。さらに、講義ノートとは違って、スタディ・ガイドの多くは既刊の図書と組み合わせになっている。このことは執筆者たちが、当該分野の最近の学問内容を織りこんで説明することを可能にする。その結果、大学出版部や民間出版社は往々にして、自分たちが著作権を保有している著作物の複製許可を求められることで、スタディ・ガイドの存在に気づくことがある。不都合な話だが、著作権をもっている資料が含まれているのに、許可もなく複製された後でようやくスタディ・ガイドに注目するようになった出版社も間々ある。こうした例は、現在あると考えられているよりも、ずっと少なくなっているであろう。きちんと運営されている通信教育部は、良心的に複製の許可を求め、かつ本文はもとより挿絵、地図、表、グラフ等を含むいかなる著作物についても承認を求めている。実際、許可にともなう料金の額は、スタディ・ガイド製作における最大の経費項目になってくるだろう。

大学レベルの通信教育は普通、シカゴ大学が大学公開部門の中に家庭学習部を設けた1892年から始まるとされる。初代学長W. R. ハーパーのリーダーシップの下に同大学は、通信による大学レベルの教育に対して一定度の正統性と社会的評価とをもたらした。それから20年ほどの間に<sup>1)</sup> 他大学、とくに大きな州立大と国有地賦与による単科大学が次第に同じ方式を採用入れていった。最近では約25万人の学生が毎年、アメリカ、カナダの単科大学、総合大学（そのほとんどが全米大学継続教育協会＝NUCEA<sup>2)</sup>のメンバーである）に設けられた通信課程に入学している。入学登録の大半は学士号取得のためのコースだが、他方でNUCEA加盟大学の多くはまた、職業資格、自己啓発のために考案されたさまざまな無単位コースの他に、高校の授業科目まで開設しているのである。

印刷された教材と郵送サービスという基本的な方法論はほぼ1世紀の間変わっていないが、通信教育はおどろくべき持久力を発揮してきた。ラジオ、テレビ、ビデオ・テープ、ビデオ・ディスク、それにコンピューター支援による授業といった、遠隔教育における華々しい革新は、従来の通信課程にとって代わりもしなかったし、その人気を弱めることもなかった。

スタディ・ガイドが地方ごとに製作されることは、よく議論されることではあるが、筋が通っている。大学レベルの通信課程は、標準化され計画化された学習に拘束されない。学部教員たちにとってスタディ・ガイドは、その地方の大学キャンパスから遠く離れて住む学生や、たとえ近くに住んでいても、都合のよい時に送られてくるこの本質的に自己ペースである方式でしか勉強できない学生たちに、手をさし延べる方法なのである。スタディ・ガイドは教授自身の代わりになるわけではなく、教授の身体的存在に代わるだけのことである。よいスタディ・ガイドは、講師のやり方、視点、そしてある程度個性まで、個人的に会ったこともない学生たちに伝える。同時にスタディ・ガイドは、その講師がもつさまざまな基準、厳しさの度合い、コースを価値あるものにする決意、といったものも反映する。スタディ・ガイドは、大学通信課程の基本的構成要素であり、それだけにこの種教育の基礎である講師・学生間の個人的相互作用を起こさせ、維持させていかねばならないのである。

地方ごとの製作が重要視され、しかも執筆者が通常は講師になるという事実は、イギリス公開大学やアメリカ以外の多くの他の通信ベースの学校や、軍隊、企業、教会、財産権関連の通信教育学校等でよく使われる、より標準化され高度に開発されたモデルと大学スタディ・ガイドとをはっきり区別する。その種モデルの場合は、1人の講師に頼ることなく、代わりに内容についての専門家、授業設計者、編集者たちがチームをつくり、多数読者に使ってもらえるようなコースをつくるために——往々にして多額の経費を使って——協同作業をするのである。

NUCEAの自主学習部の内部では、コース開発の費用と労力の重複を減らしたいと考えて、スタディ・ガイドの共同使用を各大学にすすめる試みを何年も

重ねてきた。数年にわたりコース共用のための委員会を続けてきたが、最終的には、「自主学习部が、奨励をしたり、考慮すべき基本的なガイドラインをつくらうたりすることを越えて、さらに協働の概念を拡げうる局面はほとんどない」<sup>3)</sup>と注記された上、解散が勧告された。それ以降、この問題領域では関心も活動も少なくなった。1970年代後半にはカーネギー財団が協会協力委員会(CIC — 10大大学とシカゴ大学)加盟大学で共用できるような一群の標準化されたスタディ・ガイドの開発を目的とする計画に資金を出した。この計画は自主学习部の努力と同様、ほとんど持続的な効果をあげえなかった。ほとんどの大学教授たちが標準化された教材に反対したのである。通信教育においても、教室におけると同様、教授たちは自分たちのやり方で勉強を教えたがる。自主学习部長の中には教授たちのそういった抵抗を“NIH(not invented here = 当地では考案できない)症状”と呼んで嘆いた者もいる。CICのある幹部が言ったように、「誰もが売ることには関心をもっているが、買ったがる者はほとんどいない」<sup>4)</sup>のである。スタディ・ガイドが地方ごとに執筆されることは、うまく伝統に根ざしているように見える。自主学习で学ぶ人々が、われわれが言うように、コースが通学生向け講義と同様であると信じているならば、講師が“お仕着せの”材料を厭がることを認めねばなるまい。

自主学习部は往々にして小さな出版社に似ている。最も規模が小さい場合、部長は教員と原稿の募集、報酬の交渉、著作権の使用許可、印刷の手配、刊行物の売込みといったあらゆる業務を遂行する。中規模あるいは大規模の場合には、専門編集者や授業設計者なども含む専門家たちが仕事を分担するのである。

自主学习部の中には、執筆者の手援けとなるマニュアルを刊行している所がいくつかある。これらマニュアルは、さまざまな体裁を指示し、かつスタディ・ガイドに必須の構成要素を明示する。後者は数は少ないが重要である。たとえば、講師から物理的に隔てられている学生たちは、他の何物にもまして自分たちに期待されているものを正確に知らねばならない。そのためにはコース目標にかんする明確、詳細な説明が必要となる。しかしながら、説明には接近方法

による幅が存在し、講師の好みにより、形式的で行動に関わるものからくだけたお話にまでわたる。すなわち通常はマニュアルが特別な形式とか原稿の文体を規定することはない。一定の方式を書くことがマニュアルの目的ではないのである。むしろ反対に、マニュアルは授業を個人の問題としてとらえることの重要性を強調する。ミズーリー大学の『自立学習コースのための執筆者マニュアル』は執筆者に次のように忠告する。「あなた方の言葉自体、言葉の背後にある人間存在のもつ意味を伝達するように書かれるべきである。コースが教師としてのあなたの存在を幾分でも伝達できるならば、その分だけあなたが知識を分け与える相手としての学生を知っていることを証明しているのだ」<sup>5)</sup> と。同様に、アイオワ大学の『コース執筆者のための手引き』は述べる、「執筆のスタイルはあなた自身の教授・講義方法を反映したものであるべきで、そうすればあなたの望み通り、形式的にもくだけたものにできるでしょう」<sup>6)</sup> と。

スタディ・ガイドは地方ごとに執筆され編集されるので、製作されるのも地方ごとである。最終稿は通常ワープロで作られ、それから複写機またはオフセット印刷機で複製される。しかし、いつもそうだとはいえなかった。上記のような設備が入るか、あるいは少なくとも費用効率がよくなるまでは、スタディ・ガイドの製作は時間がかかり、骨が折れ、そして経費のかかる仕事であった。選択は普通、活版印刷か謄写印刷かに限られていた。前者は時間がかかり、どれか最大のコースのために使う以外、費用的には無理だった。謄写印刷はもっとも多く使用された。タイピストたちは、どのスタディ・ガイドについても1ページごとに別々に原紙を切らねばならなかった。それから各原紙は謄写印刷機にかけられ、ページの山は手で校合された。原紙は重ねて保管することができなかった。棚に吊るさねばならず、お互いに接触しないよう――要するに大量保管の問題であった。その過程が単に時間がかかる面倒なものだっただけでなく、最終製品が美学的にもまったく魅力ない場合が多かったのである。

ワード・プロセッサと複写機がスタディ・ガイド製作を、（素人っぽく、往々にしてみすばらしく見える製品をつくる）つまらなくてきつい半端仕事から専門的外見の出版物をつくり出す効率よいプロセスへと変容させた。文字処

理 (word processing) は保管問題を最終的に解決し、またほとんど絶えることのない — 新版の教科書が出るときは避けられず、必ず問題にされねばならない — 改訂作業を容易に、かつ手際よいものにした。

大学社会の内部で何が「出版物」であり、何が「出版物」でないのか、正確に定義することは難しい。スタディ・ガイドは大量に再生産され、表紙を付けて製本され、さらに本扉、目次、参考文献といった付属物を含んでいるので、出版物と呼ぶのが適当と思われる。さらに、ほとんどの自主学習部が刊行物について著作権登録を行なっている。最近では、自主学習の専門家たちが自分たちのガイドの内容、編集の質、専門的な体裁といったものに次第に関心をもつようになってきた。NUCEAの自主学習部では、毎年、次第に過熱してきた競争の中から「抜群で」「賞讃に値する」コースをいくつか表彰しており、それらは同ジャンルにおける一種のピューリッツァ賞になっているのである。

しかしながら、別の意味においてスタディ・ガイドは、大学社会の内部で通常、出版物として扱われていない。大学市場には決して入ってこないのである。図書館その他の機関に売られたものは皆無である。スタディ・ガイドは目録にも載せられず、書店にも在庫されず、雑誌で批評されることもない。スタディ・ガイドは競争的観点から判断されることがない。自主学習部長は通常、潜在的入学者の推定にもとづいて新しい通信教育コースを依頼する。最も重要なことは、スタディ・ガイドが大学の公的な報賞システムの中では評価されないという点である。昇進とか終身在職資格とか給料とかに対する意味はもたないのが普通である。この要因が他の何物にもまして大学通信教育における新規コースの発展を妨げており、いくつかの大学における限られた講座数の説明になっているのである。皮肉なことに、ほとんどすべての通信教育課程は大規模な研究志向型の公・私立大学によって維持されており、そこでは教授たちにとって余計な授業負担を買って出るような動機は最も小さい。こうした事実直面して、自主学習部では時に新規コースの開発は教授の職域を拡大する上で貴重なステップになりうると強調する。あるマニュアルでは、執筆者に対して次のよ

うに言っている。「あなたが完成したスタディ・ガイドは、ミズーリー大学の公開講座部を通じておこなわれる講義と同じように立派な出版物なのです。したがって、それは明白な専門的業績であり、執筆者としてのあなたの名前、所属学部、大学名を記載します」<sup>7)</sup>と。同部は同じマニュアルの中で、執筆者のスタディ・ガイドと(または)推薦状を昇進・終身在職資格委員会に送りつづけることを申し出ている。オハイオ大学のマニュアルはもう少しあいまいで、昇進・終身在職資格委員会がスタディ・ガイドを評価し、「出版物、教育・サービスの一種、またはその組合わせ」<sup>8)</sup>としてさまざまな角度から考慮している、とだけ述べている。スタディ・ガイドを執筆し、通信課程で教えることが終身在職資格・昇進の場合に何度か考慮されてきたことは疑いないが、こうした記述は、現実の大学の政策というよりは自主学習部長たちの希望の表明に近いものと思われる。

アイオワ大学では、昇進・終身在職資格委員会があるスタディ・ガイドを評価し、好意的な配慮をおこなった最近例のあることが知られている。また、同大学の一専門学部、一学部だけが年次報告書中に新規通信講座の開発を高らかに謳っている。こうした事例は非常に数少ないだけに注目に値する。NUCEA加盟の3大学の通信教育部に勤務し、また他の多くの加盟大学の自主学習部長たちとの数年にわたる職業上の交際を通じて私は、スタディ・ガイドの執筆が昇進や終身在職資格や給料を決定する要因となる例はきわめて稀だと思っている。

もしスタディ・ガイドが大学における業績として考慮されないとするならば、学術的出版物とみなされるのは何故なのか。理由は、スタディ・ガイドが一次研究をもたらすことは稀だが、二次文献を扱う基礎的な知識は通常きわめて広汎であるから。かくしてスタディ・ガイドは、教科書や著作目録と同じ意味合いで学術的とみなすことができる。あるものは伝統的な論集 (anthology) に酷似している。どんな論集でも、編者は膨大な既刊資料の中から項目類を選び出し、選択基準を上手に解説し、複製許可をふくむ著作権問題ほまで注意を払う。この種の論集は、遠隔地の学生たちのために図書館の書架の代替物になるもので、もっと頻繁に企画されているのである。

他のスタディ・ガイドでも、学術的な質の点でもっと直接的な狙いをもつことができる。アイオワ大学では「古代における宗教と神秘」という古典コースの講師が自身で訳したギリシャ語、ラテン語からの翻訳を使い、自身の注記と解説を付した例がある。またスタディ・ガイドが通信教育の分野外で、貴重な学術資料として一種のアングラ的評判をかちとることがある。「アフリカ人民の文学」というアイオワ大学のスタディ・ガイドは、明らかにそのような注目を集めた。執筆者でもある同講師は、ガイドの中に現代黒人作家にかんする歴大な彼自身の文芸批評を収め、さらに何人かの作家たちとのインタビューを特集したオーディオカセットを付した。現在でもわれわれは、ヨーロッパやアメリカの研究者たちから、ガイドとカセットの注文を大量に受け取っている。

公的な学問上の認知を欠いてはいても、スタディ・ガイドの執筆は無報酬というわけではない。ほとんどすべてのNUCEA加盟機関で、執筆者＝講師は執筆に対して「超過労働手当」と呼ばれる臨時手当を受けとる。これら給与の金額は、アーカンサス州立大学の300ドルからミネソタ大学の2700ドルにまでわたり、その平均680ドルになっている。<sup>9)</sup> これは大した金額ではないが、ある学問領域、ある大学においては、教授が一冊の学術的著作によって得られると思われる最高金額に相当する。別に驚くことでもないが、この程度の給与は、人文科学とか社会科学の一部のように学外でかせぐ機会の少ない分野の教員にとっては、きわめて魅力的なもののように思われる。同額の給与でも、経営学や工学の教授たちにとっては魅力はずっと減るようであるが。

どの教員にとっても、スタディ・ガイドを執筆することは、報賞を別の重要な形で受け取ることになる。それは自分の作品をより広い市民へと広める手段である。読者たちは、同僚たちで構成されているわけではないが、鋭い感覚とすぐれた批評眼をそなえていることが間々ある。とくに成人学生は非常にすぐれていることが多い。アイオワ大学では毎年30人から50人の学生が健全な入学登録をしていると考えられる。そこで、ごく普通に4年間の生活を送るとすると、ほとんどのスタディ・ガイドは120ないし200、あるいはもっと多い部数に達する。これはそれほど多い部数ではないが、おそらく専門学術雑誌に



載る多くの論文の読者数にはほぼ匹敵するのではないか。さらにスタディ・ガイドは、教科書の新版に合わせるため、変化に正しく対応するため、また最近の業績をとりこむために、執筆者が改訂に同意するかぎり無期限に印刷が続けられる。実際、スタディ・ガイドは大学や民間出版社から出版された書物よりはるかに改訂される回数が多い。この意味でスタディ・ガイドは、よりすぐれた出版の一形態でありうるのである。

最後に、多くの講師たちは、スタディ・ガイドを執筆することは教室における講義まで向上させたと、わが編集者に語っている。スタディ・ガイドは、学習目標を記述し、資料を組み立て、他の種々の点でも講座を改良するよう、講師たちに強いるのである。

通信課程のスタディ・ガイドは、研究志向型の大学での昇進や終身在職資格にかんする伝統的なガイドラインの内部では学術出版物とみなされていないが、学術的著作物を普及させる有効な手段であることは明らかである。そして報賞が学術出版ともっとも頻繁に結びつくもの（昇進、終身在職資格）ではありえないが、ある学部教員にとっては魅力的なものでありうる。通信課程のためのスタディ・ガイドの執筆、編集、製作は、小規模ではあるが繁盛している大学出版の一つの形態を示しているのである。

#### <原注>

- 1) Ossian Mackenzie, Edward L. Christensen, and Paul H. Rigby, Correspondence Education in the United States (New York: McGraw-Hill, 1968), p. 29
- 2) The Research and Evaluation Committee of the Independent Study Division, NUCEA, prepares a statistical report annually. The most recent report, for the academic year 1984/5 is: Charles Feasley, ed., Independent Study in 1985 (Stillwater, OK: Independent Study Division, National University Continuing Education Association, 1985)
- 3) 'Report of the course sharing and acquisition Committee,' Independent Study Division, NUCEA, 1983
- 4) Memo, Bill Driscoll, CIC, to Independent Study Directors, CIC Member Institutions, 27 June 1979, CIC File, Center

for Credit Programs, the University of Iowa

- 5) Jessie Lawson, ed., Author's Manual for Independent Study Courses (Columbia, MO: Center for Independent Study, University of Missouri, 1983), p. 1
- 6) Center for Credit Programs, Guide for Coursewriters (Iowa City: Center for Credit Programs, University of Iowa, 1984), p. 7
- 7) Lawson, Author's Manual for Independent Study, p. 5
- 8) John Strain, ed., A Manual for Developing the Independent Study Correspondence Course (Athens, OH: Ohio University, 1981), p. 14
- 9) Feasley, Independent Study in 1985, pp. 14 — 15

〔後 記〕 アメリカの遠隔高等教育の教材をみると、放送を利用すると否とを問わず、スタディ・ガイドが — テキストとセットになって — 不可欠の構成要素になっていることがわかる。本論文は放送を利用しない伝統的な通信教育におけるスタディ・ガイドの現状、問題点を「学術出版」の観点から概観したものである。スタディ・ガイドという型態の教材に馴染のうすいわが国において、あるいは幾何かの参考になるかとも考え、訳出した。原文は "Correspondence study guides: an academic cottage industry", Scholarly Publishing, vol. 18. No. 3 (1987), University of Toronto Press. 著者の Von V. Pittman, JR はアイオワ大学継続教育学部履修計画センター所長である。翻訳を許可されたトロント大学出版部に対し、謝意を表する。